

† 「人はパンだけで生きるのではなく、主（※）の口から出るすべての言葉によって生きる。」 - 申命記8章3節 -

（※）神さまのこと。ユダヤ人は掟（いわゆる“十戒”。出エジプト記20章7節参照）によって神の名をみだりに呼ぶことが禁じられていたため、“主”（しゅ）と置き換えて呼びます。旧約聖書の出エジプト記3章14節にあるように、神はご自分の名を明かしていますが、ユダヤ人は今日でもこの名前を“主”に置き換えています。ちなみにアルファベットで表記すると“YHWH”となります（ユダヤ人の使っているヘブライ語には子音しかありません）。正しい発音かは定かではありませんが、“エホバ”という呼称は、神の名を示すこの4つの文字に母音をつけて読めるようにしているということです。

早いもので暦の上では春を迎えました。朝晩はまだ寒さを感じますが、日中、太陽が昇ると厚着をしていると汗ばむほどです。季節の移り変わりを実感する今日この頃です。ところで、教会にも季節があって「灰の水曜日」と呼ばれる日から「四旬節」を迎えることとなります（今年は2月17日）。「復活祭」前の40日間を指すためにこう呼ばれるのですが、この季節はイエス様が人々に伝えた良い知らせ、つまり“福音”の核心に触れることになるためにとても重要なのです。

「四旬節」は回心（神さまから離れている心を神さまの方に向き直らせること）、償い（回心することによって心にあるものを行いで示すこと）を自らに言い聞かせ、イエス様が何のために十字架刑と向きあったか、私たちの命が復活されたイエス様の命と結びつけられ、いつかは私たちに訪れる死の先に、死を超えた命を得る恵みが準備されていることを「復活祭」で実感するために過ごします。

キリスト教徒は「洗礼」によってこの信仰を刻み、イエス様の生き方と重ね合わせながら一生を過ごします。通常、入信を希望する方が「復活祭」において洗礼を受けるのはこのためなのです。

第四回目のテーマは「鬼は外、福は内。」です。

2月3日、子どもたちは節分の豆まきをしました。古くから疫病退散の意向で行われてきた豆まきは、私たちの内側から悪い心を追い出す決意を持つためにも意味のある行事と言えます。「鬼は外、福は内」という掛け声で豆をまいて鬼を追い出した子どもたち。きっと今、心の中は良い心で満たされていることでしょう。

先日、子どもたちの前で水の入ったペットボトルから空の容器に水を移しながら次のような話をしました（ペットボトルは子どもたち一人ひとりの心が入っているもの、水は悪い心と良い心の両方を意味しています。これらを使って空の容器に悪い心を表す水、つまり、鬼を追い出す様子を見せました）。

「鬼は外、福は内と言って鬼を追い出したけれど、実は鬼を追い出すだけじゃなくて、福は内という言葉も大事にしないといけないんだよ。鬼を追い出したら（ペットボトルの水を空の容器に移す）、良い心が残る。でも追い出した悪い心はいつだって戻ってくる事ができるんだ。だから、悪い心を追い出した分、良い心を入れれば、心全体は良い心でいっぱいになって悪い心が入り込めなくなるってことなんだ。だから、鬼を追い出すだけで終わりにするんじゃなくて、良い心を入れるためにみんなの心にイエス様がいて、いつも手伝ってくれているから、良い心がもっと増えるようにイエス様と一緒にがんばってみようね。」と。

クリスマスを迎えてイエス様を自分の心にお迎えした私たちは、悪いものを追い出すことだけでなく、良いものを取り込む努力にも目を向けなくてはなりません。「鬼は外」という言葉で自分の意志をもって悪いものを追い出したのなら、同じく「福は内」という言葉で自分の意志をもって良いものを取り込むために行動しなければならないということです。意志を働かせるために内に響く（良心に呼びかけられる）神さまの言葉に耳を澄ませることができるよう。「福は内」という言葉で良いものがやってくることを受け身となって待つ姿勢を見直すことができますように。